

北河内地域の生活環境の再構成に関する 環境デザインの研究

Research on Man-environment and Environmental Design in Kitakawachi Region

主任研究員：植松暉子

分担研究員：榊原和彦、星野 暁、中川 等、川口将武

「北河内地域における生活環境と環境デザイン原理に関する研究」が平成13年度完結し再スタートである。初年度の進捗状況を各研究テーマの中間報告内容を表にまとめてみると、資料収集・整理解読・調査研究の位置づけが大である。歴史的地区の再生・提案、環境オブジェ設置計画、織物による表現、里山・里地歩行路ネットワーク整備など計画・提案型テーマなどが見られる。次年度以降に向けてまとめつける全体的テーマとしたい。

研究の進捗状況

環境 領域 区分 学問 の区分	理念 概念 作業 ワーク	歴史 文化 生活史 集落史 街道史 水路史 産業史	研究 テ ー マ				
			場 所 的 文 節				
			生活文節	空間文節	地域文節	地球基盤	情報文節
学 系	資料 収集	S K U H N	S H N	S H N	S N H K	S K U	K
	整理 解読	S K N	S N	S N	S N	S K U	K
術 系	調査 研究	S N	S N	S N	S N	S U	K
	計画 提案					U	
	教育 養成						

S：榊原和彦…北河内地域における伝統的集落地区環境の保全と再構成に関する研究

H：星野 暁…北河内地域における環境オブジェ設置計画

N：中川 等…北河内地域の伝統的な生活環境と民家に関する研究

K：川口将武…北河内地域における里山・里地歩行路ネットワーク整備のための基礎的研究

U：植松暉子…北河内地域の生活環境とクラフトについて

北河内地域の生活環境とクラフトに関する 環境デザイン的研究

植松 暁子

平成 14 年 9 月、長期的共同研究「北河内地域の生活環境の再構成に関する環境デザインの研究」で生活環境全体像の研究で周辺他地域・周辺国と拡大研究が必要とされ中国の西安市（長安）を訪れた。西安はシルクロードの東の起点で中国悠久の歴史とともに生きてきた中国第一の古い古都。唐の時代には安倍仲磨呂や空海などが遣唐使として訪れたところで、日本の平安京・平城京は唐の長安をモデルにつくられた。現在の西安市は麦・稲・桑・綿・黍の生産が盛んで農牧が盛んである。

交野市倉治の氏神「機物神社」は、創建は桓武天皇（781 年～806 年）御代で、当時はこの地方の祖先である織機の技術を伝えた漢人庄員を祭神としていたと伝えられている。平安時代になり、交野地方は京の都の朝廷人の遊狩の地となり、当時盛んになった天体崇拜思想や文学的思想から、祭神は織女星の天棚織姫（あまのたなばたひめ）と変わってしまった。遣唐使により伝えられたと推測される織機の技術のルーツについて西安市（長安）を訪れた。遣唐使は、630 年～894 年十数回に渡って日本から唐へ派遣された公式使節で、第 1 次遣唐使は、630 年犬神御田鍬（いぬがみのみたすき）・薬師恵日（くすしえにし）らを唐に派遣し新羅経由の北路により 631 年長安にたどりついている。第 2 次遣唐使は、653 年南路をとった第 2 船は薩摩沖で遭難したが、第 1 船は壱岐・対馬を経て朝鮮半島の西沿岸を北上する北路をとり無事長安に着き翌年 7 月帰国している。北路を航行したのは、途中「百済」に、わが国の意志を伝えるためであったとも言われている。のち九州の南端を経由して東シナ海を横断して揚子江を航行する南島路・南路をとる様になった。最初の頃は新羅を経由する北路をとっていたので、新羅から伝えられたとも考察されたが、機物神社は漢人を祭神としているので、遣唐使により、長安から伝えられたと推測される。しかし西安市での調査も織機の技術の伝達についても、詳しく判明しなかった。

今回は、西安の広大な中国大陸の飛行機から眺めた、現風景を織物により制作し、平成 14 年 11 月 25 日～30 日大阪梅田・茶屋町画廊で個展をした。経糸は麻糸の黒糸を緯糸に金糸・銀糸と形状記憶糸を使って織りあげて、うねりをつけ「夕暮れの棚田」「海面を渡る風」「さざ波」「光る丘陵」など中国大陸などのイメージを彷彿させる、タペストリーを大・中・小の額に入れました。

北河内地域における伝統的集落地区環境の保全と 再構成に関する研究

榊原 和彦

本研究の目的は、北河内地域における伝統的集落およびその周辺で、まとまった地区を形成している市街地を抽出し、その街路・水路網、街路・水路空間構成、街区構成、敷地利用パターン、施設分布、町並み景観、社会・文化・歴史・自然条件などの環境条件を調査・分析し、再構成のための提案を行うことである。このために、昨年度から本年度にわたり、以下のような調査・分析を行った。

- ① **大東市における“水郷”集落の調査**：大東市の低平地にあった赤井村、深野北新田、灰塚村、御領村、太子田村、新田村、御供田村、氷野村、諸福村の9ヶ村および深野北新田を取り上げ、大正期以降の土地利用（水田、集落）、水路・河川、道路の変化を図化するとともに、諸環境資源の現状把握を試みた。
- ② **道路・水路ネットワークから見た北河内地域の空間構造調査**：地域空間の主要な構造化要因である道路・水路ネットワークとして、河内平野二十五街道の内「古堤街道」「清滝街道」「河内街道」および集落内道路網、寝屋川・古川に挟まれる地域を流れる水路（井路川）網をとりあげ、地図、航空写真を用いて図化した上で、それらの構造について分析した。
- ③ **“路地と井路のまち：御領”の調査と分析**：御領地区の集落・田畑・道路・水路の変遷（明治期以降）、集落内土地利用現況、環境資源分析、歴史および“水郷”の一般調査に基づく御領の考察、問題点・課題の抽出を行った。
- ④ **“伝統的集落：灰塚”の景観調査**：集落土地利用現況、屋根種類別建物分布、外壁種類別建物分布を調査し、集落全体の景観構成について考察した。
- ⑤ **微地形に着目した“寝屋川・古堤街道沿い集落：諸福・太子田”の空間調査**：集落建物と街道・路地の関係を地形の高低差に着目して整理・分析した。
- ⑥ **“歴史と共生するまちづくり”を目指した“平野屋会所”地区の調査**：深野南新田の領域とされる地区を平野屋会所を中心とする“歴史”的地区として再生するための方策を見出すための諸調査を行った。
- ⑦ **“生駒山麓集落：中垣内”の調査**：歴史的な道である「中垣内越え」の入口に位置する中垣内集落について、“物理的要因”（道、家屋、石垣……）、“歴史的要因”（神社、祠……）の調査に基づいて景観分析を行った。
- ⑧ **“おかげ灯籠”を中心とする“古街道の道具立て”についての調査**：道（古街道）の“しつらえ”の分析の一貫として「おかげ灯籠」に着目し、大東市内に現存する8カ所のそれについて調査・分析した。

北河内地域における環境オブジェ設置計画

星野 暁

北河内地域の環境デザインとして私の専門との関連から特にパブリックアートによる都市環境について考えて行くのが課題であるが、第一年目の課題は各地のパブリックアートの調査を行い都市空間における様々なアートによる環境づくりの在り方を研究することである。

大阪を始め、東京、京都、名古屋他の各地の現代のパブリックアートを調査するとともに日本の歴史を振り返り、それに先立つ道祖神、地蔵、磨崖仏などその前身となる宗教的公共物をも射程に入れて調査し、日本の都市空間の原点である村落から市街に至る空間構造も含めた調査とした。

調査の対象となったパブリックアートについて第1に場所の分類から(1)建築とアート・オフィスビル等のフロントやエントランス、壁面、中庭。(2)広場とアート・広場、駅前空間、公園。(3)都市空間とアート・街路、遊歩道、地下道、集合住宅敷地内空間、駅構内、プラットホームなどに分けることができた。第2にそれぞれの空間の広さ、高さ、奥行き、時間、自然の光、風、雨、緑とのバランス、照明といった要素のチェック。第3に周囲の景観、風景、それを構成する要素、そしてその風景の背後にある場所の持つ歴史、地域の生活形態など。第4にランドマーク性。第5に耐久性といった観点を調査項目とした。

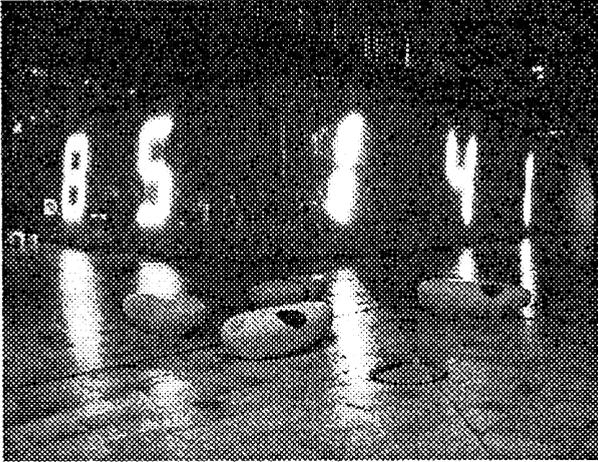
次にそのパブリックアートそのものの調査を行う。1.空間の観点から二次元性、三次元性、水平性、垂直性。2.物質的観点から自然性、人工性、素材、テクスチャー。3.色彩。4.形態として単一形態、複合形態、インスタレーション的形態、ハンギング形態、モビール性、キネティック性、親水性(水面、噴水、湧水、浮水)モニュメント性、舞台性。5.感覚的観点から身体性、視覚性、触覚性、聴覚性、嗅覚性などの調査。

最後にこれらのパブリックアートの鑑賞者と通行人、住人との関係の調査。

以上のような多岐に渡る観点から調査し、パブリックアートとして何が大切か、成功例、失敗例などを基に認識していく作業をしてみた。



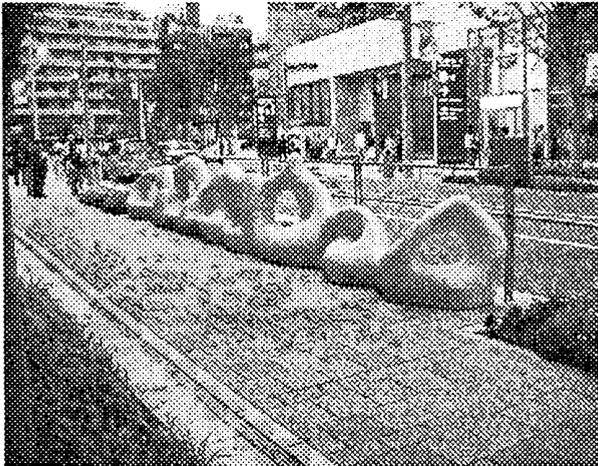
「ママン」
ルイズ・ブルジョワ
六本木ヒルズ 66 プラザ



「カウンター・ヴォイド」

宮島達男

六本木ヒルズテレビ朝日南東角



この大きな石は何処から
転がってきたのだろうか？

この川の水は

どこまで流れていくのだろうか？

僕はこれから何処へいくのだら
う？

日比野克彦

六本木ヒルズけやき坂通り

北河内地域の伝統的な生活環境と民家に関する研究

中川 等（工学部環境デザイン学科）

平成 3～12 年度の長期的共同研究組織「北河内地域における生活環境と環境デザイン原理に関する研究」の分担研究において、大阪市近郊として近年の変容が著しい北河内地域について、現環境の基盤構造をなす伝統的な生活環境と民家の諸相及びその形成過程を明らかにした。14 年度は研究対象を広げ、伝統的な農村集落の重要な一要素である新田会所について資料を収集して考察を加えた。

北河内地域では、18 世紀初期に大和川の付け替え工事が行われ、その後、大規模な新田開

発が実施され、新田の管理・運営のため各地に会所が設置された。会所には支配人が置かれ、農民から小作料を徴収し、年貢をまとめて納め、また田畑・水路・道路などの補修を行った。近世期に営まれた新田会所の屋敷と建物は、近代以後その大半が失われ、現在ではわずかに旧鴻池新田会所（重要文化財／東大阪市）と旧平野屋新田会所（大東市）が残るのみで、近在でも旧加賀屋新田会所（大阪市指定文化財／住之江区）が旧姿を伝える程度である。建物は現存しないが、深野（中）新田会所（大東市）の享保7年（1722）の建替え前後の絵図、菱屋中新田会所（東大阪市）の天保7年（1836）の絵図、吉松新田会所（東大阪市）の昭和51年の実測図が残っており、会所の屋敷構えや建物の内容を知ることができる（「旧平野屋新田会所屋敷と建物」（大東市教育委員会／平成14年））。

現存する建物と絵図に基づいて北河内地域の新田会所の屋敷構成を整理すると、①屋敷の中程に本屋を構え、東側に広い庭園を築く、②屋敷の西側または北西側に米蔵など土蔵を並べる、③屋敷の東南隅または東北隅に鎮守をまつる、④屋敷の周囲に濠をめぐらせ、南正面に長屋門を構える、などの点が多く、の事例で共通する。本屋の建物は概して規模が大きく、ふつう西側に土間、東側に居室・座敷を配する。本屋の東側に座敷を設けて庭園を整備する屋敷構えは、東方に連なる生駒の山並みを遠景として取り込み、接客空間を充実させる工夫と推察される。大和川河口付近に位置する旧加賀屋新田会所では、逆に屋敷の西側に庭園をつくり、庭内に高くそびえる築山の頂部から新田領域を見渡せたと伝えるが、この庭園配置は大阪湾沿岸の新田開発に隣接した立地条件に起因するものであろう。土蔵を屋敷の北西隅に並べることは民家の段蔵と共通し、冬の季節風から本屋を守る役割や家相上の配慮に加えて、敷地背側面の濠や川から水運により米を搬入した動線に対応したものであると思われる。屋敷内に鎮守をまつることは新田開発の拠点ならではの特徴で、つつがない新田の経営・管理を祈念した施設と考えられる。

末筆ながら、地元で河内の歴史を研究されている中川良男氏より貴重な資料のご提供をたまわり、また往時の北河内についてご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

北河内地域における

里山・里地歩行路ネットワークのための基礎的研究

川口将武（工学部）

イギリスやフランスでは、自然や歴史に接しながら歩行を楽しむ歩行路（フットパス）が、長年に渡って培われてきた市民の「歩く権利（＝Right of Way）」のもとに全国規模で整備されている。我が国には環境省が所管する東海道自然歩道や近畿自然歩道、大阪府のダイヤモンドトレールなど野外レクリエーションや自然観察といった非日常性の強い山道の整備が進め

られてきたが、日常生活圏域での安全、快適でかつ便利な歩行が保障される歩行路は、未だ十分ではなく整備が待たれるところである。

本研究は、人口過密な大阪市近郊にあって都市化が進行しているものの、近郊農業と一体化した田園地域としての里山・里地を歩行路（遊歩道・散歩道）という日常性の高い生活基盤要素の整備・創造により有機的に結びつけることによって、市民が自然的、歴史的環境と身近に触れ合う場を提供し、地域社会の持続的な発展を目指すことをねらいとしている。

本年度の研究は、その初期段階の基礎的研究として、安全で快適な日常空間としての歩行路のネットワーク性を重点に、大阪府全域における歩行路（遊歩道・散歩道）ルートの実態を把握しつつ、北河内地域の現状を捉えた。

大阪府下 40 市町村へ所管する歩行路マップ類の提供依頼をしたところ、31 市町村（北部 14、南部 17）から、約 60 種のルートマップ類の提示を受けた。歩行路マップの発行は、公園緑地、観光、広報、教育委員会、商工会といった部署が主だったところであった。情報提供があった市町村数は、北部、南部（大和川以北と以南に区分）ともおおむね差異はないものの、ルートマップ数は北部エリアの 19 葉、南部エリアの 35 葉と違いが見られた。数市にまたがる広域連携型のルートは互いに 3 ルートずつ設定されていた。収集できたマップ類を歩行路の特性より整理し、国土地理院発行の 1/50,000 地形図上にプロットを行った。北部エリアにおいては、22 ルートの情報提供があり、その中でもハイキング系ルートが目立った。一方、南部エリアにおいては 35 ルートの情報提供があり、その中でも見所散歩系ルートが特に目立った。大阪府下においては、地域環境の特性が少なからずルートの設定に反映されていることが読みとれる。

北河内地域においては、枚方市と守口市から提供を受け、地域内を流れる河川沿いや水路跡を活用し淀川や大規模公園とをネットワークさせている。また、生駒山麓に係わる市町村（枚方・交野・四条畷・大東・東大阪・八尾・柏原・生駒・平群・三郷）と府県の連携によって、広域的な歩行路ルートが設定されており、大阪府府民の森を拠点に生駒山系の環境資源や歴史資産を有機的につなげていることが特徴である。

今後は、マップに設定されている歩行路環境の評価を市民または市民団体との協働体制で行いつつ、新たなルート設定に役立つための評価・調査手法を探ることを課題としたい。